



特別寄稿

## 私のヒンズー語の二人の先生 (インド駐在時代の秘話)

人文科学科 三好章一

私は、本校に着任する直前まで、インドの首都ニューデリーで商社マンとして駐在生活をしていました。5年前に突然「インドへ行ってくれ」と上司より青天のへきれきの業務命令。今更もう海外勤務は無い、と信じていた矢先の出来事であった。覚悟を決め「一か八か、なるようになれ」不安と共に赴任したのである。

発展途上国のインドは、私にとっては、何もかも未知の国であった。インドは、欧州大陸がすっぽり入る人口10億人を超すアジアの超大国である。言語は、ヒンズー語を主要母国語とする15の言語が地域に応じて使われている。せっかくインドで生活するのだから、公用語は、英語もあり支障はないとはいえ、せめて片言のヒンズー語が使えれば、視野が広がるだろうと、好奇心だけは、人一倍旺盛だった。英語と違ってしまったくのゼロからの出発である。私にとって、書体は象形文字と同様まったく判読できない。唯一、耳だけが頼りなのである。

毎日の通勤は、車で15分。専属の運転手が、社宅と事務所を送り迎えしてくれる。ある朝、ふと「あの標識は、何と読むの？ 意味は？」ものめずらしさから次々に質問していた。気がついたら毎朝の日課になって1年近くも続いた。一方、事務所では、インド人スタッフが電話でやりとりしているのを何気なく聞き耳を立てていた。すると不思議に「ナマステ、アチャー、ティケ、ナヒーン、カセハン」しょっちゅう使う言葉が自然と頭に残るのである。「こんにちちは、わかった、OK、だめだめ、元気が」きくと、こんな具合と勤を働かせて楽しんでいた。「よしこれを試してみよう」と度胸だけを頼りに、インド人相手に使い始めたら、眼光鋭い相手の表情が穏やかになるではないか。

週末は、娯楽の少ないインドに駐在する日本人ビジネスマンにとっての息抜きは、ゴルフを楽しむことであった。ゴルフ場では、専属のキャディーに世話になるのである。打ったボールが、コースを外れ右左と藪によく吸い込まれていく。その度に、キャディーはゴルフバッグを引きずりながら、一目散で藪に向かって走る。彼らの報酬(チップ)は、炎天下に半日の肉体労働をして、新品のゴルフボール一個分(500円)程度である。だから、マスター(主人である私)のボールが見つからなければ、ただ働き

になる一大事なのである。

藪の中でキャディー達が、大声で「アゲー、ピチェ、シーダ、コギヤ、ミリギャー」叫びあっている。「もっと前、後ろ、まっすぐ、無い、あった」状況から容易に想像がつく。まれに、よいショットが出ると彼らは、「ボーダ アチャ、サバーシュ！」とマスターに拍手してくれる。「Very Good, 最高！」べたほめ作戦で気分良くしてくれるのだ。この週末ゴルフのお陰で知らぬ間に身についた私のヒンズー語は、大いに威力を発揮し、さながら「インド人もびっくり」キャディー仲間に恐れられた。

実は、日本人は、キャディー仲間であい合いになるほど人気者なのである。気が良くチップを乱発してくれることを良く知っており、その情報は、代々仲間から仲間へと受け継がれるのである。駐在期間が3年近くになるとキャディーは、「マスターの後任はいつ来るのか、彼は、ゴルフをやるのか」など情報網を駆使して探りを入れてくる。インド人社会の情報網は、使用人から使用人へとあっという間に伝わる。世界最先端をいくIT情報産業開発国家の、彼らの頭脳の優秀さを底辺の使用人の世界において垣間見た気がする。

気が付いたら、日常生活でそれなりにインド人と思疎通が出来るようになっていた。この世に生まれた赤ん坊が、時間とともに自然に母国語を口に感じる感覚に近いのだろう。この歳になって納得したような気がする。好奇心と環境が、外国語を習得するもっとも大事な要素であることを体感したのである。頭であれこれ考え悩むより思い切って身体ごとぶつかっていくのが手っ取り早い。

任期を終え、インドを離れるに当たり送別のあいさつを英語で片言のヒンズー語を交え職場の仲間感謝を表した。すると、苦勞を共にした多くのインド人仲間から異口同音に「Miyoshi San, ボーダ アチャ！」(Very Nice)と離任を惜しまれた。自分の言葉で思いを伝えることの大切さを再認識したのである。

青天のへきれきから4年間のインド生活を無事に終えたのも、親身になって助けてくれた運転手と、週末の都度、ゴルフ場の藪に入り、根気強くボールをさがしてくれたキャディーの二人の献身的な陰の支えがあったのである。